

立正大学博物館年報

14

平成 27 (2015) 年度

立正大学博物館

序

平成 14 年に大学開校 130 周年として熊谷校地に開館した立正大学博物館は、平成 27 年度は 14 年目でした。また、博物館開館に尽力され初代館長をつとめられた坂詰秀一文学部教授が平成 17 年度をもって定年を迎えられ、平成 18 年からは池上が 2 代目館長をつとめて 10 年目でもありました。

平成 27 年度の企画展示としては、仏教系大学として取り組んできた海外仏跡調査の紹介をしました。半世紀以前に海外調査の先駆的調査として釈尊の居住された都城であるカピラ・バスの可能性の高いネパールのティラウラ・コット遺跡を調査しており、現在はウズベキスタンのカラ・テペ遺跡を調査しています。ともにクシャーナ朝の領域に属した遺跡としての関連性が認められます。

また特別展としては、博物館が所蔵する仏教関連資料のうち、平安時代に起源して様々な願いをこめて造営された経塚関連の資料をまとめて「経塚の諸相」として展示しました。とくに東京国立博物館に勤められ、長らく立正大学で経塚を講じられた三宅敏之氏の寄贈資料を中心として展示しました。

博物館が開館した当時は、7 学部の 1・2 年生と、法学部、社会福祉学部、地球環境科学部の 1～4 年生が所属し盛況であった熊谷校地は、いまや法学部が品川校地に移転し、社会福祉学部、地球環境科学部の 1～4 年生が所属するのみとなり、博物館に興味を有する学生も稀になってきております。

熊谷校地全体の活性化が求められている現状に、15 周年を迎える立正大学博物館も積極的に役割を果たしていきたいと考えております。

平成 28 年 3 月

博物館長 池上 悟

目 次

序

目次

I. 博物館の概要…………… (2)

- (1) 組織と職員
- (2) 立正大学組織表
- (3) 立正大学博物館規定
- (4) 立正大学博物館細則
- (5) 施 設

II. 事業報告…………… (7)

- (1) 開館日数・入館者数
- (2) 出 版
- (3) 資料活用
- (4) 展示
- (5) 教育普及
- (6) 調査・研究
- (7) 受贈資料

III. 受贈図書目録 …………… (19)

I. 博物館の概要

(1) 組織と職員

a. 職員

館長	池上 悟
専門職員	三宅 慶
事務嘱託	浅見幹雄

b. 運営委員

第1号委員

池上 悟 (博物館長・文学部教授)

第2号委員

三宅 慶 (専門職員・非常勤嘱託)

第3号委員

舟橋 哲 (法学部長・法学部教授)

松井秀郎

(地球環境科学部長・地球環境科学部教授)

第4号委員

小畑二郎 (経済研究所長・経済学部教授)

山口忠利

(社会福祉研究所長・社会福祉学部教授)

第5号委員

安田治樹

(博物館関係学識経験者・仏教学部教授)

第6号委員

野沢佳美

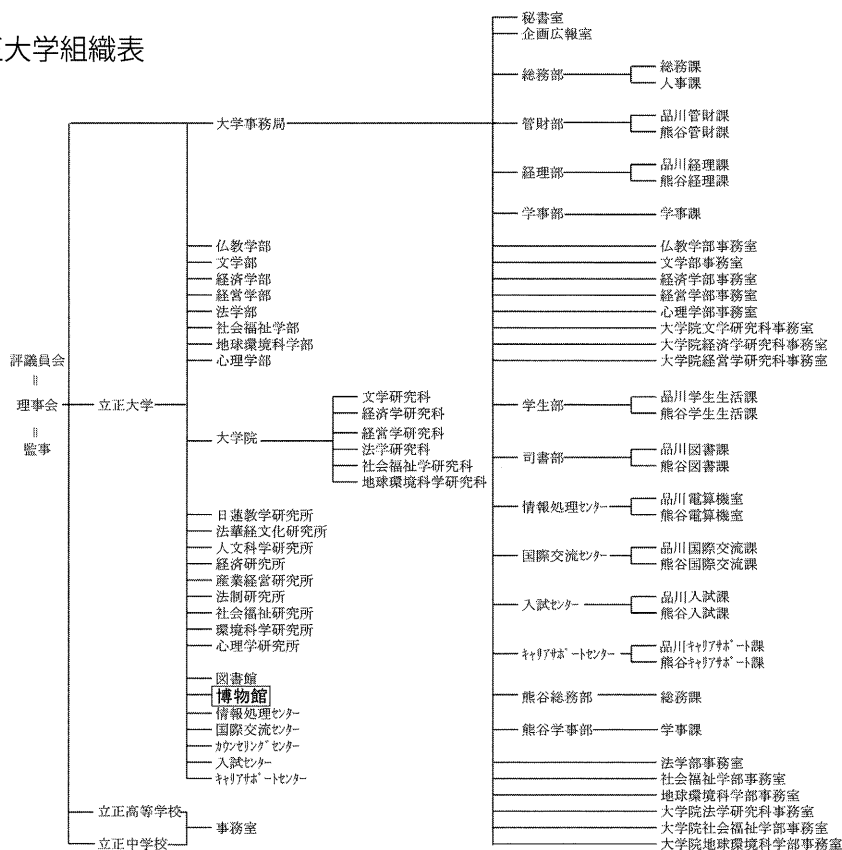
(文化史関係学識経験者・文学部教授)

第7号委員

川野良信

(自然誌関係学識経験者・地球環境科学部教授)

(2) 立正大学組織表



(3) 立正大学博物館規定

(設置)

第1条 立正大学学則第9条の規定に基づき、熊谷キャンパスに「立正大学博物館」(以下「博物館」という。)を置く。

(目的)

第2条 博物館は歴史・宗教・芸術・民俗・産業・自然誌に関する学術的資料(以下「資料等」という。)を収集・保管し、これを組織的に展示し、広く社会に公開するとともに、これらの調査研究を行うことによって大学における教育・研究の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 博物館は前条に規定する目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 資料等の収集、整理および保管
- (2) 資料等の展示および公開
- (3) 調査研究活動
- (4) 調査研究成果の発表および出版
- (5) 本学における博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力
- (6) 講演会、講習会および特別展示会の開催
- (7) その他必要な事業

(職員)

第4条 博物館に次の職員を置く。

- (1) 館長
- (2) 専門職員

(館長)

第5条 博物館に館長を置く。

- 2 館長は博物館を代表し、博物館の業務を統括する。
- 3 館長は全学協議会に諮り、本学専任教職員より学長が任命する。
- 4 館長の任期は3年とし、再任を妨げない。
- 5 館長が欠けたときは補充しなければならない。この場合において、その任期は前任者の残任期間とする。

(専門職員)

第6条 専門職員は第3条に定める事業に従事するとともに、これに関連する業務を行う。

- 2 専門職員は館長の推薦を受け、学長が任命する。
- 3 専門職員は博物館学芸員の資格を有するものを基本とし、任期は3年とする。

(運営委員会)

第7条 博物館の管理運営に必要な事項を審議するため、博物館運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(委員会・構成)

第8条 委員会は、次の者をもって構成し、学長が委嘱する。

- (1) 館長

- (2) 専門職員

- (3) 学部長から2名

- (4) 研究所長から2名

- (5) 博物館学芸員関係学識経験者から1名

- (6) 考古学および文化史関係学識経験者から1名

- (7) 自然誌関係学識経験者から1名

2 館長の推薦により、前項に定める委員のほか、学識経験者若干名を加えることができる。なお、学識経験者委員の委嘱は学長が行う。

3 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者に出席を求め、意見を聴くことができる。

(委員の任期)

第9条 前条第1項第3号乃至第6号および第2項の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 任期中に欠員が生じた場合は、委員を補充し、任期は前任者の残任期間とする。

(委員会の運営)

第10条 委員会は、館長が招集し、議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は出席委員の過半数の同意をもって決する。

(委員会の審議事項)

第11条 委員会は、以下の事項について審議する。

- (1) 資料等の収集、整理、保管、展示および公開に関する事項
- (2) 博物館の管理運営に関する事項
- (3) 調査研究活動ならびにその成果の発表および出版に関する事項
- (4) 博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力に関する事項
- (5) 博物館の予算・決算に関する事項
- (6) その他必要な事業に関する事項

(細則)

第12条 この規程に定めるもののほか、管理運営上必要な事項は、立正大学博物館細則によるものとする。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は委員会および全学協議会の議を経るものとする。

附 則

この規程は平成28年4月1日から施行する。

(4) 立正大学博物館細則

(趣旨)

第1条 この細則は立正大学博物館規程第12条の規定に基づき、同規程の施行について必要な事項を定めるものとする。

(開館日)

第2条 立正大学博物館（以下「博物館」という。）の開館日は原則として立正大学学則第31条に定める休業日および火曜日を除く日とする。

(開館時間)

第3条 博物館の開館時間は、午前10時から午後4時までとする。

(入館手続)

第4条 博物館に入館する者は所定の手続をとらなければならない。

2 館長は博物館における教育および研究活動に支障があると認める場合は、入館を許可しないことがある。

(入館料)

第5条 博物館の入館料は原則として無料とする。

(入館者の義務)

第6条 入館者は博物館の施設・資料等を毀損し、または滅失したときは、直ちに館長に届け出て、その指示に従わなければならない。

2 入館者は前項の規定にある損害に対し損害賠償の義務を負わなければならない。ただし、事情によりこれを免除または軽減することができる。

(資料等の利用)

第7条 博物館内において撮影、実測、特殊観察、複製製作等の目的で資料等の利用を希望する者は、館内利用許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 資料の所蔵者および寄託者が学外にある場合は、当該資料の利用を希望する者は事前に所蔵者または寄託者の承認を受け、それを証明する書類を館内利用許可申請書に添付しなければならない。

3 利用を許可された者は次に掲げる事項を遵守しなければならない。

(1) 利用に際しては博物館の専門職員の指示に従うこと。

(2) 利用による成果を刊行物、映画フィルム、ビデオテープ等に発表したときは、本博物館の名称およびその所蔵、または保管である旨を明記すること。

(3) 利用により生じた著作物等は利用許可申請書に記載の目的以外には使用しないこと。

(4) 館長は、第1項の利用許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館内利用許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、立正大学博物館運営委員会（以下「委員会」という。）の議を経なければ

ならない。なお、館長は管理上支障があると判断した場合は、許可を取り消すことができる。

(5) 第1項による利用許可を受けた者が、当該資料等を毀損した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

(資料等の利用料金)

第8条 前条第3項により許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入しなければならない。

2 館長は、前項の定めにかかわらず次の各号のいずれかに該当する場合は、利用料金を全額免除することができる。

(1) 各種教育機関や国または地方公共団体および公益法人が行う教育、学術および文化等に関する事業

(2) 博物館法（昭和26年法律第285号）に規定する博物館等の行う事業

(3) 学術研究

(4) 前号のほか、館長が全額免除すべき特別の理由があると認めたとき。

3 前項の定めにより利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物1部以上を無償で博物館に納入しなければならない。ただし、館長が認めたときはこの限りでない。

(資料等の貸出)

第9条 資料等の貸出を受けようとする者は館外貸出許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 館長は前項の館外貸出許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館外貸出許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、委員会の議を経て決定しなければならない。

3 館長は管理上支障があると認められる場合は、前項の許可を取り消すことができる。

4 第1項による許可を受けた者は、貸出期間中に当該資料等を毀損または滅失した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

(資料等の貸出料金)

第10条 前条第2項による許可を受けた者は、別に定める料金を速やかに経理部に納入するとともに、貸出期間中および貸出に伴うすべての経費を負担するものとする。

2 前項の定めにかかわらず、第8条第2項第1号、第2号および第4号のいずれかに該当する場合は料金を全額免除する。

3 前項の定めにより貸出利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物を1部以上、博物館に寄贈しなければならない。ただし、館長が特に認めたときはこの限りでない。

(寄託)

第11条 資料等を寄贈・寄託しようとする者は、その品目、点数、期間等を寄贈申請書寄託申込書に記入のうえ、館長に提出するものとする。

2 館長は前項に定める寄贈・寄託の申出があった時は、委員会の審議に附し、受入の承認がなされたものについて、学長に意見書を提出しなければならない。

3 館長は寄贈・寄託を受けた時は、寄贈・寄託者に対して当該資料の受領証・受託証を交付するものとする。

4 館長は寄託を受けた資料等について十分な注意をもって保管しなければならない。

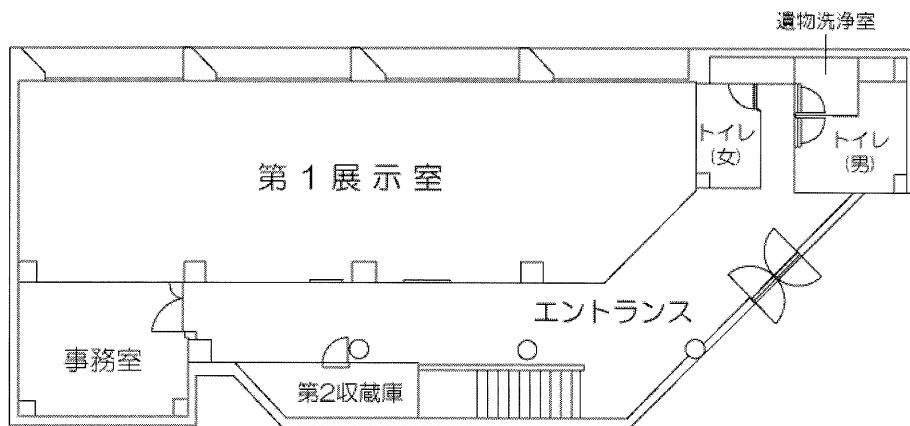
(細則の改廃)

第 12 条 本細則の改廃は、委員会および全学協議会の議を経るものとする。

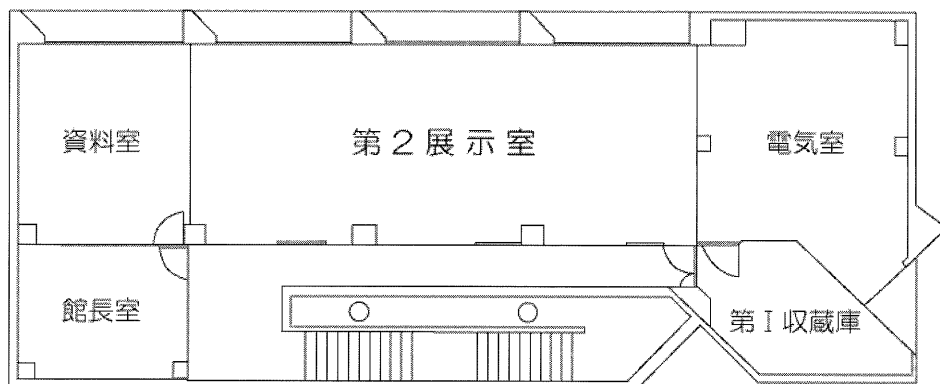
附 則

1 この細則に定めのない事項については、館長がその都度、委員会に諮り処理する。

2 この細則は平成 14 年 4 月 1 日から施行する。



1階 平面図



2階 平面図

- 建物
所在地・・・埼玉県熊谷市万吉 1700
建築面積・・・376.8㎡
構造・・・鉄筋コンクリート造 2階建

●各室面積一覧

(1階)

- 第1展示室・・・93.88㎡
- 事務室・・・17.10㎡
- 第2収蔵庫・・・3.22㎡
- トイレ・・・11.01㎡
- 遺物洗浄室・・・2.26㎡
- エントランス・・・45.64㎡

(2階)

- 第2展示室・・・71.22㎡
- 館長室・・・16.98㎡
- 資料室・・・23.89㎡
- 第1収蔵庫・・・12.30㎡
- 電気室・・・39.00㎡

●各室仕様

(第1展示室・事務室)

- 床・・・タイルカーペット敷
- 壁・・・ビニールクロス貼り
- 天井・・・ミネラートン

(第2展示室)

- 床・・・タイルカーペット敷
- 壁・・・ビニールクロス貼り
- 天井・・・ミネラートン

(館長室・資料室)

- 床・・・タイルカーペット敷
- 壁・・・ビニールクロス貼り
- 天井・・・ジブトーン

●電気設備

- 受電設備・・・6.6KV
- 変圧器設備・・・電灯ー100KVA 動力ー80KVA
- 照明設備・・・展示室ーハロゲンランプ使用
館長室・事務室・資料室ー蛍光灯使用

●防犯・防災設備

- 防犯設備・・・各室熱センサー取付、非常通報設備
- ITV設備・・・CCDカメラ4台、展示室等監視
- 自動火災報知設備・・・P型1級5回線
- 消火設備・・・粉末消火器9台

●空調設備

- 空調機・・・空冷式、パッケージエアコン(個別)

●給排水設備

- 給水設備・・・市水道使用
- 給湯設備・・・貯湯式電気湯沸器

II. 事業報告

(1) 開館日数・入館者数

平成 27 年 4 月 1 日（水）から平成 28 年 3 月 31 日（木）の間、延 224 日開館し、総来館者数は 1444 名であった。内訳は、一般の方 624 名、本学学生 357 名、本学教職員 57 名、オープンキャンパス時の来館者数 406 名である。以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが 4 回行われた。その際の来館者数は 406 名であった。また、市民大学等の生涯学習関連の来館が 3 度行われ、その際の来館者数は 215 名であった。

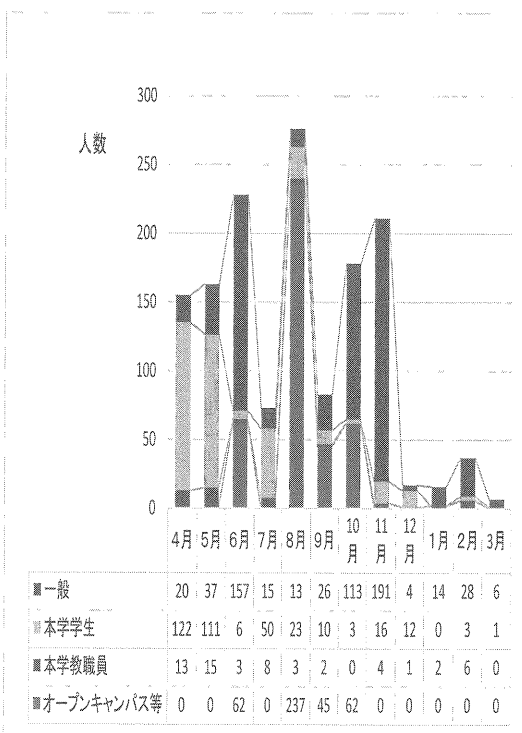


表 1 平成 27 年度月別入館者数

(2) 出版

本年度は、以下の出版物を刊行した。

- ・『立正大学博物館年報』13 号
- ・立正大学博物館案内 リーフレット
- ・第 10 回企画展図録『立正大学の海外佛跡調査』
- ・館報 万吉だより 21 号・22 号
- ・品川キャンパス展示図録『梵音具－撫石庵コレクション－』
- ・第 10 回特別展図録『経塚の諸相』

(3) 資料活用

当館所蔵の資料を以下の博物館等に貸出した。

貸出資料：『撫石庵コレクション考古資料図録 III』写真データ一式

貸出機関：ビジネス教育出版社

貸出期間：平成 27 年 6 月 11 日（木）～6 月 26 日（金）

利用目的：①ビジネス教育出版社・創業者（真鍋孝志）の「偲ぶ会」パンフレット掲載

②「偲ぶ会」の際にスライドショーとして使用。

貸出資料：吉田格コレクション・称名寺貝塚出土資料

土器 8 点・骨角器 31 点・貝輪 3 点

貸出機関：横浜歴史博物館

貸出期間：平成 28 年 1 月 31 日（土）～3 月 21 日（月）

利用目的：企画展示「称名寺貝塚とその時代－土器とイルカと縄文人－」での展示及び図録掲載

(4) 展示

1. 常設展示

- 第1展示室(1F) -

眞鍋孝志氏(日本古鐘研究会会長)より寄贈されたアジア諸地域の梵音具を中心とする撫石庵コレクションおよび立正大学考古学研究室が1958～1980年にかけて文部省(現 文部科学省)の科学研究費の交付などを受けて実施した「古代窯業の考古学的研究」によって発掘された資料を中心に展示されている。

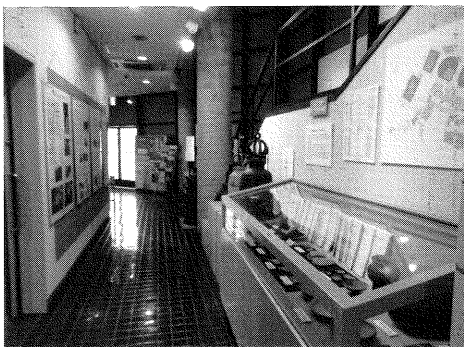
この他に、旧石器時代の資料として北海道白滝遺跡・報徳遺跡、神奈川県朝日遺跡の出土品が展示され、縄文時代では埼玉県石神貝塚、古墳時代では埼玉県野原古墳群の出土資料を展示している。

また、熊谷キャンパスにおける施設の新築などに際して、法(文化財保護法)によって定め

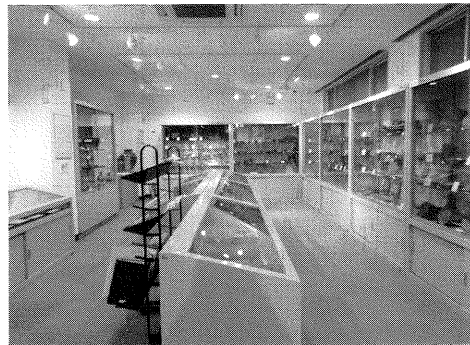
られた遺跡の発掘調査を実施しており、その折、発掘された資料を展示している。

古代では、青森県前田野目窯跡、埼玉県新久窯跡・八坂前窯跡、広島県青水窯跡などの出土品を展示している。いずれも古代窯業生産の実態、土器の編年、瓦蜴の供給問題についての貴重な資料として知られている。

とくに、伝樞原市出土の梵鐘は、わが国の初現期の梵鐘として10指に入るものであり、極めて貴重な資料である。この伝樞原市出土鐘を復元した鐘が寄贈された。



エントランス展示状況



第1展示室・東側展示状況



第1展示室・西側展示状況



新久窯跡展示状況

- 第2展示室 (2F) -

吉田格コレクション、樺太出土資料、ネパール・ティラウラコット出土資料を展示している。

吉田格コレクションは、吉田格氏（立正大学専門部地歴科・昭和16(1941)年卒・平成18年没）寄贈のコレクションである。吉田氏は縄文文化研究者として著名であり、とくに縄文時代早期の花輪台式土器、後期の称名寺式土器は吉田氏によって設定された型式標準資料として学界に周知されている。

とくに称名寺貝塚出土の土器・石器・骨角器および骨角器原料（鹿角）は縄文文化の研究上、きわめて重要な資料である。

また本草学者・伊藤圭介（日本最初の理学博士）蒐集の石器は『日本産物誌』明治9(1876)年に収められているものであり、嘉永5(1852)年の箱書きを持つ収蔵箱に収納されている石器とともに、極めて貴重な資料として吉田コレクションに収められている。

樺太出土資料は、久保常春氏（元 本学名誉教授）寄贈のコレクションで、同氏が1930年代に樺太の地を踏査された際に収集されたものである。樺太出土資料は、現在、日本各地に所蔵されているが、その一つとして立正大学所蔵品の存在が知られている。

ネパール・ティラウラコット出土資料群は、1967年～1977年にかけて、立正大学がネパール王国に派遣した発掘調査団によって発掘された資料であり、とくに日・ネ親善のためネパール考古局より寄贈された資料である。

ティラウラコット遺跡は、釈尊出家の故城 - カピラ城跡の有力な比定遺跡として世界の学界に知られていた。その地を10年間にわたって発掘調査した結果、カピラ城跡の最有力遺跡として注目されるにいたっている。

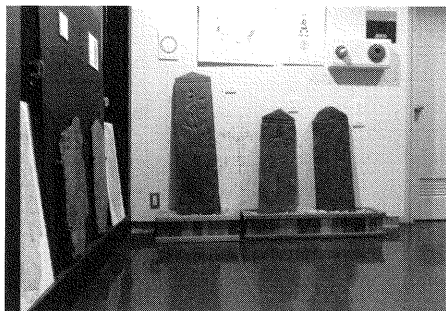
東西約400m、南北約480mの方形の城跡内に7つの遺丘が存在し、そのうちの2箇所を発掘して得られた資料である。



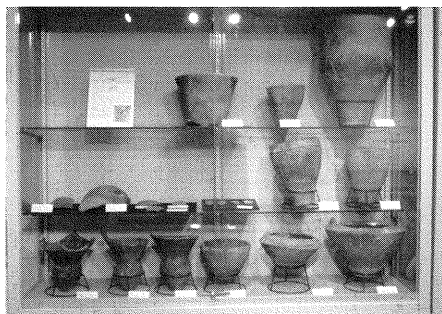
第2展示室・西側展示状況



第2展示室・東側展示状況



2階展示室入口・板碑展示状況



第2展示室・東側展示状況

2. 企画展示

第10回企画展『立正大学の海外佛跡調査－ティラウラ・コットからカラ・テペヘー』

◆期間：【品川キャンパス】平成27年6月19日（金）から10月31日（土）

◆内容：立正大学が行った海外佛跡調査の成果を纏め、その内容をパネルにて紹介し、併せてネパールのティラウラ・コット遺跡出土資料の展示を行った。

立正大学が海外で実施した仏教遺跡の調査は、昭和42年からの10年間にわたって行われたネパール王国のティラウラ・コット遺跡にまで遡る。これは、釈尊が出家前に居住した「カピラ城」の有力比定地の調査であり、釈尊の時代を示す北方黒色磨研土器を確認するなど相応の成果を挙げた。そして、遺跡はシュンガ朝（B.C. 2～1世紀）～クシャーナ朝（A.D. 3世紀中葉）の頃であることが明らかになった。また、東西約450m、南北約500mで南北に長軸をもつ長方形を呈する城塞遺跡であることがわかり、4つ以上の門、2つの貯水池、8つの遺丘を有することが確認された。遺物は、鉄製品、青銅製品、貨銭、石製品、テラコッタ、土器、煉瓦などが出土している。

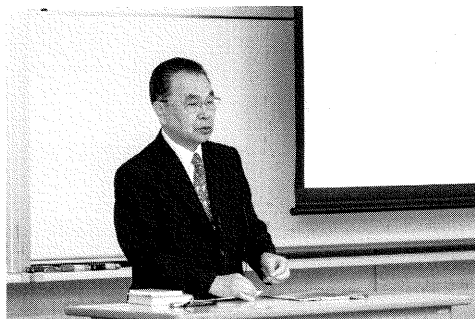
平成26年度からは、立正大学ウズベキスタン学術調査隊として中央アジアのシルクロードの地であるウズベキスタン共和国、古代バクトリア地方に所在するカラ・テペ遺跡の発掘調査を開始した。カラ・テペ遺跡は、A.D. 1世紀～3世紀のクシャーナ朝を盛期として展開した、この地方最大の仏教遺跡であり、半世紀以上に渡って調査されている重要な遺跡である。立正大学は、この遺跡の全容解明と遺跡の変遷家過程の確認を目的として、調査を開始した。

2つの遺跡は、所在地が遠く離れ、一見何の

関わりも持たないように見えるが、ともにクシャーナ朝の領域内に入っており、また、7世紀の中国僧である玄奘の存在によっても有機的なつながりを指摘できる。

玄奘は、仏跡参拝と經典研究を目的として、629年に中国からインドへ旅立った。そして、その旅路において、カラ・テペ遺跡及び、ティラウラ・コット遺跡を訪れている。この事は、史実として旅行記である『大唐西域記』に記されている。

つまり、40年の時を経て再開された立正大学の海外仏教遺跡の調査は、玄奘によって結びついていることが指摘できる。



講演中の元館長 坂詰秀一名誉教授



特別展示の様子

【関連事業①】

平成27年7月18日(土)に「立正大学の海外
佛跡調査－ティラウラ・コットからカラテペへ
－」と題し、池上館長による講演会が品川キャン
パスにて行われた。

【関連事業②】

平成27年10月31日(土)に立正大学ネパー
ル交流プロジェクトの一環として、坂詰秀一前
館長による特別講演会「釈迦の故郷を掘る～
ティラウラ・コット遺跡発掘調査～」が行われ
た。このプロジェクトに関連して、ティラウラ・
コット遺跡の紹介パネルと出土品の移動展示が
行われた。

3. 特別展示

・『経塚の諸相』(第10回特別展)

◆期間:平成28年1月15日(金)～2月27日(土)

◆内容:平成27年度の特別展として、「経塚」
を取り上げた。当館が所蔵する「三宅敏之氏経
塚関係資料」をはじめとする経塚関連資料を展
示するとともに、博物館の所在する熊谷の地を
含む武蔵地域における経塚を中心に扱った。

立正大学は、関東最古の伝統を誇る仏教系大
学である。このため考古学においても、仏教考
古学を第一の題目として研究をすすめてきた。

当館でも、その伝統を反映して多くの仏教関
連資料を所蔵しており、過去の企画展・特別展
において仏教遺物関連の展示を行ってきた。

今回の特別展では、仏教考古学の中でも古く
から重要な研究対象の一つとされてきた「経塚」
を取り上げた。「経塚」とは、経典を容器に入れ
未来仏の出現に期すために造営された「塚」
のことを指す。

第1部では、「経塚の概要」と題して、古代
の埋納の経塚、中世の埋納・廻国の経塚、近世

の一石経の経塚・廻国納経と変化する様相を示
した。

第2部では、「武蔵国の経塚」と題し、武蔵
国における各時代の経塚の様相をまとめた。

関連資料として、古代に造営されたと考えられ
ている、朝霞市・宮戸薬師堂山経塚出土資料4
口を展示した((内訳:経筒1口(経筒蓋は和
鏡)、常滑製甕2口(経筒外容器)、常滑製鉢1
口(外容器蓋))(朝霞市博物館蔵・県指定文化
財)。また、熊谷市・妻沼経塚の跡地に建立さ
れた「経塚之碑」の拓本なども展示した。

第3部では、「立正大学と経塚研究」と題し、
本学の考古学研究室と経塚研究の関わりをまと
めた。経塚研究の基礎を築いた石田茂作博士、
その高弟である三宅敏之氏、立正大学名誉教授・
当館元館長である坂詰秀一博士の経塚関連の業
績を紹介した。

その他、「立正大学博物館蔵経塚関係資料」
として、泥塔5点(奈良県・東大福寺)、泥塔
経12点(鳥取県・竹内経塚)、瓦経2点、(福
岡県・飯盛山経塚他)、経石(東京都・増上寺、
千葉県・大椎経塚)、納札及び納経資料(千葉県・
龍正院)を展示した。

また、「三宅敏之氏経塚関係資料」では、氏
の著書や、代表的な論文である「六角宝幢式経
筒」『東京国立博物館紀要』第4号(昭和43年)
で使用された図版などを展示した。さらに、併
せて六角宝幢式経筒の実物資料として草加市・
柿木経塚出土経筒と、宇都宮市・聖山公園遺跡
2号墳出土経筒を展示した。

その他、参考資料として、栃木県足利市・鶏
足寺出土と伝えられている白磁四耳壺(経筒外
容器)も展示した。



第10回特別展「経塚の諸相」展示の様子

【関連事業】

平成28年1月23日（土）に「経塚の諸相」と題し、池上館長による講演会が品川キャンパスにて行われた。

4. 品川キャンパス展示

平成26年に引き続き、平成27年度も品川キャンパス9号館エントランスにて、博物館収蔵資料の紹介や、企画展・特別展の移動展を行った。

・『立正大学の海外佛跡調査－ティラウラ・コットからカラ・テペヘー』（第10回企画展）

◆期間：6月～10月

◆内容：企画展として、立正大学が行った過去と現在の海外佛跡調査の成果を纏め、その内容をパネルにて紹介し、併せてネパールに所在するティラウラ・コット遺跡出土資料の土器、動物型土偶、貨幣などの展示を行った。

・『梵音具－撫石庵コレクション－』

◆期間：11月～翌年2月

◆内容：立正大学博物館の主要な資料の一つとして、眞鍋孝志氏が寄贈された「撫石庵コレクション」がある。撫石庵コレクションには、日本の梵鐘を始め、中国・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマーなどの世界各国の鐘がある。今回の

品川キャンパス展示では、そのなかでも日本国内の移動可能な小形の半鐘の実物展示を行い、併せてパネルにて「撫石庵コレクション」の一端に触れる機会とした。

・『経塚の諸相』（立正大学博物館第10回特別展移動展示）

◆期間：3月

◆内容：第10回特別展移動展として、内容を一部縮小し、解説パネルと瓦経、泥塔経、木製納札、紙製經典などの実物資料や経筒のレプリカを展示した。

（5）教育普及

1. 博物館館務実習

平成27年度の博物館学芸員課程の館務実習を以下の日程で延8日間行った。実習生は6名で、その内訳は文学部史学科5名、仏教学部1名であった。

以下の日程で延8日間行った。実習生は6名で、その内訳は文学部史学科5名、仏教学部1名であった。

[資料収集実習事前講義]

◆7月8日（水）6限 品川キャンパス

池上悟館長が、資料収集対象である近世の資料収集実習の調査方法について講義を行った。また、資料収集実習の調査方法についても学んだ。

[資料収集実習]

◆7月19日（日）・20日（月） 東京都大田区池上本門寺

担当：池田奈緒子（立正大学博物館研究員）

池上本門寺の境内墓地において、近世墓標の調査を行った。調査カードに墓標の型式・年代、

大きさ・石材・銘文などの情報を記録し、実測、写真撮影、拓本を行った。

[館務実習] 博物館及び、熊谷キャンパス内

◆ 8 月 20 日 (木)

担当：田嶋和久先生 (文学部社会学科准教授)
日本刀の概要について学び、模造刀を使用し、刀剣の取り扱いと手入れの実習を行った。

◆ 8 月 21 日 (金)

担当：井上尚明先生 (立正大学非常勤講師)
資料の取り扱いと梱包について学んだ。実際に梱包材を作り、収蔵資料を梱包し、開梱する一連の作業を行った。



刀剣の取り扱いと手入れの実習



平成 27 年度 館務実習生

◆ 8 月 22 日 (土)

担当：池田奈緒子 (立正大学博物館研究員)
資料収集実習で得られたデータを整理し、台帳の作成を行った。また、作成した台帳を使用して、墓石を紹介するパネルを作成した。

◆ 8 月 25 日 (火)

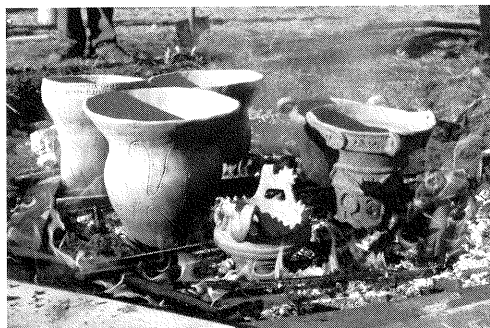
担当：川野良信先生 (地球環境科学部教授)
岩石学の基礎知識を学んだ。事前に荒川河川敷にて採集した岩石などを使用し、岩石標本を作成した。

◆ 8 月 26 日 (水)

担当：石山秀和先生 (文学部史学科准教授)
古文書の取り扱い方や、調査方法を学び、実際に古文書と和本の調査カードを作成した。

2. 土器焼成

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習 6」(4 年生対象)の一環で行われている。今年度も、平成 27 年 11 月 14 日 (土)・15 日 (日)の 2 日間、博物館が協力し、熊谷キャンパス敷地内において行われた。参加者は、考古学専攻 5 名、大学院生 2 名で講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成した。



野焼きの様子

(6) 調査・研究

野島貝塚資料について

※1 ※2
釧持輝久・浪形早季子

1 はじめに

野島貝塚は横浜市金沢区野島町 24 付近に所在し、標高約 53m の陸続きの孤立丘である野島に位置する。貝塚は島の北側頂部縁辺及びその斜面部に所在する。野島貝塚は横浜市最古の貝塚であり、「野島式土器」(縄文時代早期)の標識遺跡でもある。また平成 2 (1990) 年横浜市指定史跡となっている。

野島貝塚の発掘調査は昭和 22 ~ 23 (1947 ~ 48) 年に吉田格や赤星直忠などにより小規模なものが数度実施された。これは、戦前の野島山頂部は笹や雑木に覆われ、貝殻等の散見も確認できなかったが、野島が本土防衛のために防空砲台となり、その工事により貝層断面が露出して、終戦後に貝塚であることが確認されたためである。また昭和 58 (1983) 年には岡本勇を代表とした野島貝塚調査団による測量調査が実施されている。

平成 27 (2015) 年に筆者らは立正大学博物館所蔵の野島貝塚出土の骨角貝製品をみる機会を得たので、本稿ではこの資料を含め、野島貝塚出土の動物遺体とともに、生業について一考してみたい。

本稿で述べる骨角貝製品は昭和 22 (1947) 年、吉田格により調査された立正大学博物館所蔵の吉田格コレクションの釣針 1 点と採集品の貝輪 1 点である。また動物遺体は赤星直忠による発掘資料であり、赤星直忠の発掘調査による遺物の大部分は現在、横須賀市自然・人文博物館、一部が神奈川県立歴史博物館に収蔵されて

いる。

なお、本稿において貝類及び脊椎動物遺体については釧持が、骨角貝製品については浪形が記載した。

2 貝層と出土動物遺体

昭和 20 年代の発掘調査において、貝層が確認された地点は 2 ヶ所である。南貝塚は島の北側縁辺部に所在し、厚さ 20 ~ 30 cm 前後の貝層が東西 15m、南北 10m の広さに分布する。野島期・茅山下層期の貝塚である。北貝塚は島の北側斜面中腹にあり、海岸へ降りる階段の東側に所在する。この階段は現在は封鎖されているが、数年前までは貝殻が表面に散っているのを確認できた。厚さ 30cm 程の貝層が東西 10m、南北 6m にわたってみられる。時期は茅山下層期である。なお、昭和 58 (1983) 年の測量調査では、赤星直忠が「北貝塚」としたものを東貝塚としているが、本稿では遺物の混乱を避けるために、赤星直忠が調査をした北側斜面の貝塚を北貝塚とした。

以下、出土貝類及び脊椎動物遺体を示す。

a. 貝類 (◎多い ○やや多い ×稀)

南貝塚

赤星直忠の報告と横須賀市自然・人文博物館に収蔵されている貝類の種名を突き合わせてみると、腹足綱 18 種・二枚貝綱 22 種計 40 種類の貝が出土している (北貝塚の貝類および南北両貝塚の魚類・哺乳類も同様に突き合わせた)。

イシダタミ・○コシダカガンガラ・○スガイ・○オオヘビガイ・×ウミニナ・イボウミニナ・ツメタガイ・ホソヤツメタ・×エゾタマガイ・○アカニシ・ミガキボラ・ナガニシ・○イボニシ・レイシ・○テングニシ・ヒカリギセル・×ナミギセル・×ナミコギセル・コベルトフネガ

※1 立正大学同窓 日本考古学協会

※2 (公財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

イ・○カリガネエガイ・×ワシノハ・×サルボウ・×アカガイ・×ハイガイ・イガイ・アズマニシキ・◎マガキ・×ヤマトシジミ・○アサリ・ハマグリ・○オニアサリ・○カガミガイ・ウチムラサキ・オキシジミ・×シオフキ・×バカガイ・ミルクイ・×セミアサリ・オオノガイ・×マテガイ

主体となるマガキは赤星直忠の報告によれば、発育が充分でないとされている。横須賀市自然・人文博物館に所蔵されているもので、計測できるものでは殻長が 44 mm、殻高が 71 mm とやはり小型である。

北貝塚

腹足綱 19 種、掘足綱 2 種・二枚貝綱 21 種計 42 種類の貝が出土している。

×イシダタミ・×コシダカガンガラ・サザエ・スガイ・オオヘビガイ・×ウミニナ・×イボウミニナ・×カニモリガイ・ツメタガイ・ハナツメタ・×エゾタマガイ・アカニシ・レイシ・イボニシ・×ミガキボラ・テングニシ・×ナガニシ・×バイ・×ナミギセル・×ツノガイ・×ヤカドツノガイ・カリガネエガイ・コベルトフネガイ・×ワシノハ・×アカガイ・×サルボウ・×マルサルボウ・×ハイガイ・アズマニシキ・イワガキ・◎マガキ・×シオフキ・×ミルクイ・×ヤマトシジミ・○アサリ・カガミガイ・ハマグリ・ウチムラサキ・オニアサリ・オキシジミ・×オオノガイ・×マテガイ

赤星直忠の記録によれば、マガキが最も多く、これに次いでアサリが多く出土している。横須賀市自然・人文博物館に収蔵されたマガキは殻高が 10cm を超えるものもあるが、多くは 10cm 以下のものである。また、昭和 58 (1983) 年 3 月の調査時に、筆者が北貝塚の露頭で観察し採集したマガキは、大きなものでも殻高が 9.5cm で、多くは 6cm 前後のものであった。

b. 魚類

南貝塚

軟骨魚綱 サメ・アカエイ

硬骨魚綱 ボラ・ブリ・イナダの仲間・スズキ・クロダイ・マダイ・コブダイ

魚類の中で最も多く出土しているマダイは、堤らの推定体長を求める式に合わせてみると、計測可能な 11 点のうち、大きなもので体長 69cm、小さなもので体長 27cm であり、体長 41 ~ 45cm のものが多い。マダイの主上顎骨のなかには、外側から突いた刺突痕のあるものもある。

北貝塚

ボラ・スズキ・クロダイ・マダイの 4 種類が出土している。

c. 鳥類

三浦半島の他の縄文時代の貝塚と同様に鳥類は少なく、アホウドリ類・ウ類・カモ類・カラス類が出土したのみである。北貝塚の遺物の中には、鳥骨は認められなかった。

d. 哺乳類

南貝塚

モグラ類・ネズミ類・イルカ類・クジラ類・タヌキ・イヌ・アナグマ・ネコ・二ホンジカ・イノシシが出土している。

北貝塚

イルカ類・クジラ類・ネコ・二ホンジカ・イノシシが出土している。

なお、ネズミ類はその骨の大きさからみて縄文時代のネズミとは考えられず、後世の混入と思われる。また、ネコにおいても同様に後世の混入と考えられる。

南貝塚・北貝塚共に狩猟の中心はイノシシと二ホンジカにおかれていたことがうかがえる。特にイノシシが多いことは、他の三浦半島の縄文時代早期から中期の貝塚と共通するとこ

ろである。イノシシと二ホンジカの歯の状態をみると、イノシシは老若関係なく、二ホンジカは比較的若い個体を捕っている。また、イノシシの場合、牝も捕っている。

3 骨角貝製品について

a. 釣針（図 1-1, 写真図版 1-1）

本報告資料は昭和 22（1947）年、吉田格の発掘調査により出土した釣針である。現在は吉田格コレクションとして立正大学博物館に所蔵されている。

大型釣針で、長さ 68.55mm、幅 39.30mm を測る。素材には鹿角を用い、又状部を半裁した板状素材から作りだしている。頭部は楕円状の半円形を呈し、長径 9.33mm、短径 6.17mm を測る。糸掛けの加工とみられる 2 本の溝が作られる。上部の溝は全周するが、下部の溝は前面部にのみ施される。軸頂は尖らず、平坦である。軸から屈曲部にかけての内側部分はよく研磨されているが、外縁は一部鹿角表面の凹凸が残り、後面は一部に海綿質が残るなど、器体の研磨が完了しておらず、未成品と推測される。

b. 貝輪（図 1-2, 写真図版 1-2）

アカガイ左殻の貝輪未成品である。本資料は立正大学博物館に所蔵されている野島貝塚の資料であるが、吉田格コレクションではなく採集品である。殻長 117.91 mm、殻高 89.36 mm、内径長 76.35 mm、内径高 54.02 mm であり、アカガイのサイズとしては一般的である。中央部への穿孔がみられるのみで、外側及び内側からの敲打痕はみられない。また外縁部も未除去であり、表面の研磨も施されていない。貝輪の製作工程の第 1 段階の殻頂部除去の作業のみ行なわれている。アカガイの成貝を使用しているため、成人女性の手が余裕で入る大きさである。また厚みもあり、一番厚い部分では放射肋部分で 4.5

mm を測る。

4 野島の周辺環境と生業

野島海域の周辺環境は時代によって大きく異なる。野島貝塚が形成された縄文時代早期後葉には、金沢八景駅付近の低地で見つかったカキ礁より、現在より海面が 15m ほど低かったことが判明している。また平潟湾の地層と基底の地形より当時の野島及び夏島はともに湾に突き出た岬の先端部であったと考えられている。

縄文時代早期後葉は貝塚が次第に増加し、分布も全国に拡大する時期である。貝塚のまともが見られる地域もあり、内湾系貝塚を主とする。野島貝塚も内湾性貝塚であり、南北両貝塚共にマガキを主とし、次いでアサリが多い。マガキは赤星直忠の報告によれば、発育の悪いものとされる。また、この時期の三浦半島の貝塚では、大きく成長したハイガイが多く出土するが、野島貝塚では南北両貝塚共に稀であった。この点に関して赤星直忠は、報告の考察の中で、現在では東北以北の海に棲息するエゾタマガイが出土していることより、海水温の関係からと推察している。多く出土したマガキとアサリは干潟や砂泥底の海岸に多く棲息する貝である。これに加えて南貝塚では、岩礁性の海岸に多く棲息するコシダカガンガラ・スガイ・オオヘビガイ・イボニシがやや多く出土している。当時の平潟湾には岩礁の海岸も存在し、南貝塚を残した人々が、スガイなどの小型巻貝の採集にも力を入れていたことがうかがえる。南貝塚に対して北貝塚ではスガイなどの小型巻貝も出土するが、南貝塚ほどではないようである。

野島貝塚から出土した魚類の中では、沖合の流れの速い海域に棲息するマダイが最も多く、これに次いで河口域に棲息するスズキ・ボラ・クロダイが多い。この 4 種類が南貝塚の漁撈の中心であったといえる。北貝塚でも同様に

ある。出土したマダイの推定体長が 41 ～ 45cm のものが多く、この大きさのものを多く捕っており、これは縄文時代早期後葉の茅山上層期の吉井貝塚でも同様であった。

野島貝塚からは本報告資料も含め、骨角製の釣針が 5 点出土していることや出土魚類の習性からみると、釣漁法が大きな位置を占めていたと思われる。また、骨製のヤスが出土していることと、マダイの主上顎骨に外側から突いた刺突痕があるものが出土していることから、ヤスを使用した漁法も行われていたと考えられる。出土した魚類の習性より、主な漁期は春から秋にかけてと思われる。

釣針は縄文時代早期初頭からみられる漁具であり、野島貝塚のすぐ傍に位置し、早期初頭の横須賀市夏島貝塚からも最古級の釣針が出土している。夏島貝塚からはクロダイやスズキなどの内湾性魚類とカツオやマグロ類などの外洋性回遊魚類が出土している。早期後葉になると本報告資料や横須賀市吉井貝塚にみられるような大型で鹿角の叉状部を利用した釣針が作られるようになり、このように鹿角の叉状部を素材に用いるのはこの時期からである。以後、この方法が縄文時代後・晩期に至るまで西日本を含む広い範囲で用いられるようになる。また野島貝塚からは小型の釣針も出土しており、すでにこの時期には様々なサイズの釣針が作られ、対象魚別に使い分けていた可能性が考えられる。

貝輪の出現で関東地方の確実な例は縄文時代早期中葉の夏島貝塚の貝輪である。これはサルボウガイを使用しており、出現期の貝輪は内湾種を使用しているものが多い。神奈川県立歴史博物館所蔵の野島貝塚出土の貝輪はサルボウガイと報告されているが、筆者が実見したところ、サトウガイを使用しており、外洋種の打ち上げ貝を利用していたと思われる。出土貝類や

脊椎動物遺体からは主に内湾域のものを利用していたと思われるが、外洋域に生息する資源の利用も想定される。同属の内湾種サルボウではなく、サトウガイを選択していることや本報告資料にみられるようにアカガイを利用していることなどから、初期の貝輪の素材の選択に、大きさが非常に重要視されていたのではないかとと思われる。これについては改めて報告し、検討したいと思う。

最後になりましたが、ネコの骨については当時、早稲田大学におられました金子浩昌先生に鑑定していただいたものである。また、資料を報告するにあたり、池上悟館長をはじめ、立正大学博物館の方々、横須賀市自然・人文博物館の稲村繁氏、神奈川県立歴史博物館の千葉毅氏には便宜をはかっていただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- (1) 赤星直忠 1948 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』
1 東京考古学会
- (2) 赤星直忠「赤星ノート」
- (3) 岡本勇 1984 「横浜市野島貝塚調査概要」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』26 神奈川県教育委員
- (4) 堤俊夫・川島卓・浜田勘太 1982 「三浦市大浦山海蝕洞穴より出土した魚骨の種属判定と体長の推定」『京急油壺マリンパーク水族館年報』11. 京急油壺マリンパーク
- (5) 吉田格 1948 「野島貝塚」『遺跡』3 鎌倉考古学同好会
- (6) 松島義章・川口徳治朗 1991 「横浜南部、瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の ^{14}C 年代値とそれに関連する問題」『神奈川県立博物館研究報告(自然科学)』
20

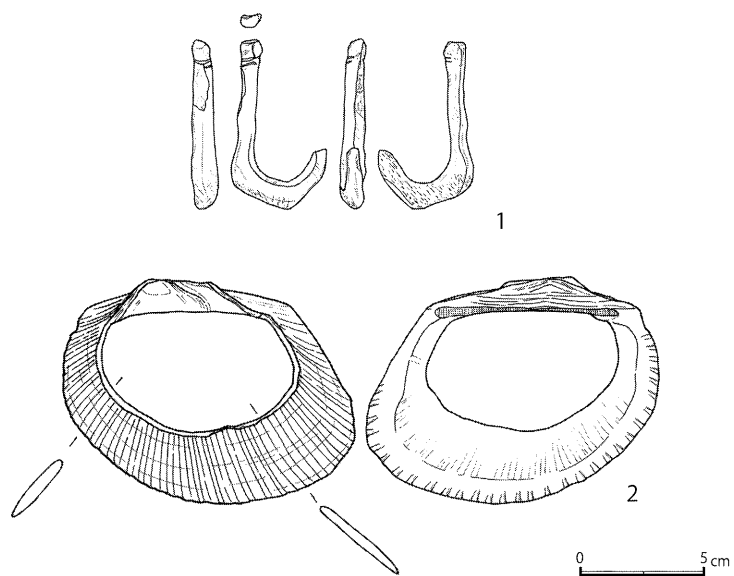
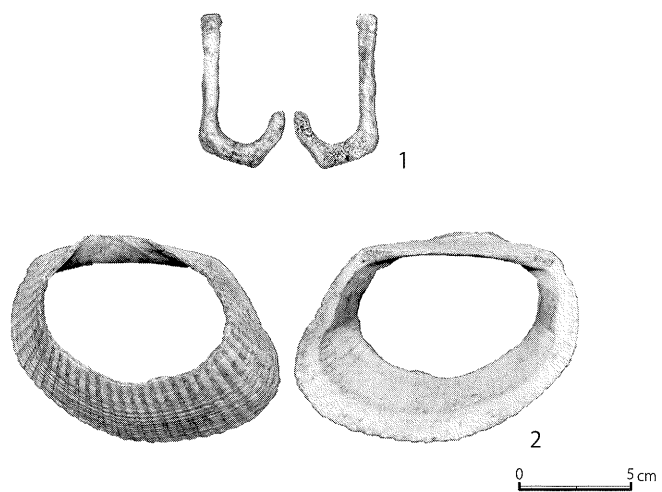


図1 野島貝塚出土骨角貝製品 1 釣針 2 貝輪



写真図版1 野島貝塚出土骨角貝製品 1 釣針 2 貝輪

Ⅲ. 受贈図書目録（2015 年 4 月～2016 年 3 月）

〈青森県〉

八戸市教育委員会

八戸市埋蔵文化財調査報告書

- ・第 149 集 八戸市内遺跡発掘調査報告書 32
- ・第 150 集 白蛇遺跡
- ・第 151 集 史跡根城跡発掘調査報告書 XIV

岡前館第 60 地点

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

- ・研究紀要 第 4 号
- ・特別展図録 2015 漆と縄文人
- ・小川原湖周辺の縄文文化
- ・堀り day はちのへ 第 18 号

一般社団法人 小牧野遺跡保存活用協議会

- ・青森市小牧野遺跡保護センター 縄文の学び舎・小牧野館ガイドブック

〈宮城県〉

東北学院大学博物館

- ・年報 vol.5

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

- ・年報 第 6 号

〈福島県〉

福島県文化財センター白河館

- ・まほろん通信 Vol.55・56

〈新潟県〉

長岡市立科学博物館

- ・館報 No.99

〈富山県〉

富山市教育委員会

- ・富山市日本榎遺跡発掘調査報告書 75 号

〈茨城県〉

取手市埋蔵文化財センター

- ・取手の昭和時代－取手市誕生までの道のり－
- ・装身具の魅力－華麗な出土装身具－

〈群馬県〉

安中市学習の森 ふるさと学習館(歴史博物館)

- ・古代碓氷の馬と牧
- ・鷲宮咲前神社太々神楽奉納 200 年記念 咲前神社太々神楽展
- ・城絵図にみる上州の戦国時代－富原文庫所蔵城絵図の世界－

かみつけの里博物館

- ・第 23 回特別展 豊饒の神か害獣か 縄文から平安時代一人の動物観を考える。

高崎市観音塚考古資料館

- ・改訂版 観音塚古墳の世界 高崎市観音塚考古資料館

安中市教育委員会

- ・学び舎に遺る郷土の歴史 一造土館から安中小学校へ

〈埼玉県〉

鶴ヶ島市教育委員会

- ・第 75 集 鶴ヶ島市内遺跡発掘調査報告書

富士見市立水子貝塚資料館

- ・平成 26 年度企画展 縄文中期の転換 松ノ木遺跡にみる土器の変化プロセス

比企郡吉見町教育委員会

- ・第 14 号 町内遺跡 9 北下砂遺跡

川越市立博物館

- ・博物館だより 第 74 号～第 76 号
- ・収蔵資料目録 (13) 細田源吉文書
- ・第 41 回企画展 古代入間群の役所と道
- ・第 42 回企画展 妖怪

- ・開館 25 周年記念特別展「小堀遠州と川越藩主」
ー遠州と酒井忠勝の交流を中心にー

埼玉県立歴史と民俗の博物館

- ・ミュージアムヴィレッジ大宮公園 トークイ
ベントブックレット 氷川神社の歴史を語るー
自然と文化ー
- ・氷川神社と大宮神社 展示解説書
- ・紀要 第 9 号
- ・埼玉の夏祭り 調査外報Ⅲ ー秩父・児玉ー

埼玉県鴻巣市教育委員会

- ・第 18 集 赤台遺跡（第 4・5・6 次調査）
- ・第 19 集 九右衛門遺跡（第 6・7 次調査）
- ・第 20 集 下閭遺跡（第 2 次調査）

蕨市立歴史民俗資料館

- ・紀要 第 12 号

埼玉県立自然の博物館

- ・平成 26 年度特別展 恐竜時代 ー海と陸の
支配者たちー
- ・ニュースレター 潮 第 23 号・第 24 号
- ・研究報告 第 9 号

鉄道博物館

- ・館報 第 4 号
- ・第 11 回 企画展 ふたつのスタート 北陸新
幹線・上野東京ライン開業記念展
- ・大宮駅・宇都宮線開業 130 周年記念企画展図
録

埼玉県立川の博物館

- ・紀要 第 15 号
- ・かわはく No. 51 ～No. 53

熊谷市立熊谷図書館

- ・平成 27 年度企画展 ～春の美術展～ くまが
やの美術展 ～日本画・南画・油絵画・書～
- ・熊谷染関連資料調査報告書 II ー岸家図案・
スクリーン型紙・道具類 / 染谷家型紙ー

熊谷市教育委員会

- ・熊谷市史 資料編 1 考古

- ・埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 18 集
石原古墳群 IV・不二ノ腰遺跡 III 永井太田北
廓遺跡 杉之道遺跡 彦松西遺跡 ー市内遺跡
発掘調査報告書 V ー

- ・第 19 集 石原古墳群 V・不二ノ腰遺跡 IV
- ・第 20 集 籠原裏古墳群 IV（籠原裏古墳群第
12・13・14・15 号墳）籠原裏遺跡 III ー熊谷
都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地
内遺跡発掘調査報告書 III ー

- ・第 17 集 萩山遺跡 PL・図版編 本文編

美里町教育委員会

- ・美里町遺跡調査会報告書 第 10 集 稲荷
林遺跡
- ・第 24 集 御社遺跡・美里町 326 号古墳・上
川輪遺跡・前山 B 地点遺跡
- ・美里文化財ガイドブック

春日部市教育委員会

- ・春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 17
集 作之内遺跡 3 次地点 西の宮東遺跡 1 次地
点

春日部市郷土資料館

- ・新・春日部市施行 10 周年記念事業 春日部
市郷土資料館夏季展示（第 51 回）旅の途中
でひとやすみー江戸時代の旅と粕壁宿ー

入間市博物館

- ・紀要 第 11 号
- ・入間市博物館情報紙 NEWS A L I T No.
72・73

戸田市立郷土博物館

- ・紀要 第 25 号
- ・郷土博物館だより Vol. 43
- ・博物館・自然学習センターを活用した事例集
V
- ・戸田市立郷土博物館要覧（平成 26 年度事業
報告）（平成 27 年度事業予定）
- ・第 25 回企画展（戸田市平和事業）戦争と人々

の暮らしー戦後120年・110年・70年ー
・第31回特別展 戸田ボートコース物語ー
オリンピックがやってきたー

蓮田市教育委員会

・埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第54集

神川町教育委員会

・神川町埋蔵文化財調査報告 第8集

埼玉県立嵐山史跡の博物館

・館報 第34号

・中世黎明ー時代を変えた武士と民衆ー

入間郡三芳町教育委員会

・第40号 三芳町埋蔵文化財報告 サガヤマ遺跡第1地点 発掘調査報告書

埼玉県教育委員会

・埋文さいたま No.58 埼玉県の遺跡と出土品情報誌

埼玉県立歴史と民俗の博物館

・戦国図鑑-Cool Basara Style-

・平成27年度要覧

飯能市郷土館

・紀要 第7号

・館報 第11号

白岡市教育委員会

・白岡市埋蔵文化財調査報告 第24集 沖山遺跡(第1地点) 沖山西遺跡(第1・2・3地点) 大町遺跡(第2地点) 市内遺跡群発掘調査報告書 XXII

日本工業大学 工業技術博物館

・工業技術博物館ニュース No.91

川口市立科学館

・年報 平成26年度

埼玉県立川の博物館

・埼玉県川の博物館特別展 魚と人の智慧くらべー魚の生態と伝統漁法ー

行田市郷土博物館

・館報 第18号

・第25回テーマ展 忍の街道をゆくー中山道・館林・日光脇往還ー

・第29回企画展 相撲ーいにしえのりきしの姿ー

・行田市郷土博物館収蔵資料目録 福田家文書目録

埼玉県立歴史と民俗の博物館

・埼玉県立歴史と民俗の博物館だより /The AI MUSEUM Vol.10.2

・特別展 慈光寺 国宝 法華経一品経を守り伝える古刹

埼玉県立さきたま史跡の博物館

・第27年度企画展 古墳の終焉と律令時代の幕開け

・館報 No.10

・紀要 第8号

・最新出土品展 地中からのメッセージ

朝霞市博物館

・朝霞市博物館調査報告書 第7集 朝霞歴史年表

・テーマ展示 植物・動物と大昔の暮らし

さいたま市立博物館

・第39回特別展縄文人の「タイムカプセル」ー南鴻沼遺跡の成果からー

・年報 平成26年度

久喜市立郷土資料館

・第6回特別展「懐かしい道具たち」ー祭り・暮らしー米つくりの道具ー

・笛の音 創刊号～第3号

サトエ記念美術博物館

・生誕130年記念斎藤与里展ー巨匠が追い求めた永遠なる理想像ー

さいたま文学館

・館報 第18号

・企画展「百人一首」

宮代町郷土資料館

- ・道中日記 ～江戸時代の旅～

加須市教育委員会

- ・加須市埋蔵文化財調査報告書

ふじみ野市立上福岡歴史民族資料館

- ・ふじみ野市誕生 10 周年記念 第 27 回特別展 戦後のあゆみ

埼玉郷土会 高柳 茂

- ・埼玉史談 第 48 号・第 50 号

草加市立歴史民俗資料館

- ・日光道中（街道）と参勤交代

〈千葉県〉

市立市川考古博物館

- ・館報 第 42 号

千葉県立関宿城博物館

- ・研究報告 第 19 集
- ・平成 27 年度企画展「海路から広がったやきものー近世以降の関東ー」に係わる図録

一般社団法人 日本サイエンスコミュニケーション協会

- ・一般財団法人 新技術信仰渡辺記念会 科学技術調査研究助成（平成 26 年度上期）科学系博物館等におけるサイエンスコミュニケーション活動実態調査報告書ーその現状と今後ー
- ・袖ヶ浦市郷土博物館

- ・平成 27 年度企画展 I 水神下遺跡と奈良輪宿

千葉県立中央博物館分館 海の博物館

- ・海の生き物観察ノート⑫ ヒラムシの博物誌
- ・平成 26 年度マリンサイエンスギャラリーくらげ展 展示解説書

千葉県立中央博物館

- ・豊饒の房総 千葉県立中央博物館展示案内

千葉県立中央博物館 房総の山のフィールド・ミュージアム

- ・ニュースレター しいむじな 第 45 号
- 2014 年夏

〈東京都〉

公益財団法人 渋沢栄一記念財団 渋沢資料館

- ・近代紡績のスズメー渋沢栄一と東洋紡ー
- ・渋沢史料館 収蔵品展 『徳川慶喜伝』と渋沢栄一 展示記録・講演録
- ・〈企画展〉開館 30 周年記念 渋沢栄一再発見！ー渋沢史料館のあゆみと名品ー 展示記録・講演録

- ・館報 2009 年～2012 年度

- ・企画展図録「私ヲ去リ、公ニ就クー渋沢栄一と銀行業ー」

- ・書籍「渋沢栄一記念財団の挑戦」

- ・渋沢研究 第 28 号 1 月号

- ・青淵 第 793 号～第 796 号

- ・青淵 第 799 号～第 803 号

大東文化大学博物館

- ・大東文化大学博物館講座だより 第 8 号

武蔵国分寺跡資料館

- ・武蔵国分寺跡資料館だより 第 21 号

女子美術大学

- ・女子美大広報誌 JOSHIBI 第 181 号・第 182 号

- ・女子美術大学美術館年報 第 12 号

公益財団法人東京都都市づくり公社 鉄建・武蔵野トランスポート建設共同企業体 テイクイトレード株式会社

- ・第 38 集 丸山 B 遺跡 東京都三鷹市 井の頭 丸山 B 遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書（第 3 次本発掘調査）

立正大学経営学会

- ・立正経営論集 第 47 巻第 1 号

立正大学文学部

- ・立正大学文学部 90 周年記念誌 立正大学文学部 90 年の歩み 軌跡と躍進

仏教系大学会議

- ・如是我聞 第 21 号

東洋書店

- ・大学アドミニストレーターの朝鮮 立正大学に懸けた男の軌跡

全国科学博物館振興財団

- ・milsil No.1 ～No.6

國學院大學博物館

- ・東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業報告書

國學院大學学術資料センター

- ・國學院大學学術資料センター研究報告 第 31 輯

玉川大学教育博物館

- ・博物館ニュース「SHU」 No.44・No.45
- ・紀要 第 12 号
- ・館報 第 13 号

明治大学校地内遺跡調査団

- ・明治大学校地内遺跡調査研究報告書 7

明治大学学術・社会連携部博物館事務局

- ・年報 2014 年度

明治大学博物館

- ・明治大学博物館研究報告 第 20 号

多摩美術大学美術館

- ・変化する様式 変わらない人間へのまなざし

株式会社 Acube（エイキューブ）

- ・三鷹市埋蔵文化財調査報告書 滝坂遺跡Ⅳー東京都三鷹市中原 滝坂遺跡発掘調査報告書

武蔵国分寺跡資料館

- ・武蔵国分寺資料館だより 第 22 号～第 24 号
- ・国分寺市・坂戸市 合同企画展 東山道武蔵路を探る 路でつながる古代の国分寺と坂戸

日本ユネスコ協会連盟

- ・世界遺産年報 2016 No.21

学習院大学史料館内 学芸員課程事務局

- ・学芸員 No.19

お札と切手の博物館

- ・お札と切手の博物館ニュース vol.36・37

学校法人 東京家政学院生活文化博物館

- ・「うっとり…レース 一本の糸からつくる美空間」

〈神奈川県〉

横浜市歴史博物館

- ・横浜市歴史博物館 NEWS 第 38 号
- ・企画展 すくすく育てみんなの願いー出産と育児をめぐるモノがたりー
- ・横浜市ふるさと歴史財団 8 施設連携展示 横浜のあゆみ

大磯町郷土資料館

- ・資料館資料 15 横溝コレクション 馬の資料目録
- ・資料館資料 16 用田村伊藤宗兵衛家文書目録
- ・用田村伊藤宗兵衛家文書の世界ー古文書が結ぶ二つの地域ー

〈山梨県〉

山梨県立考古博物館

- ・第 33 回特別展 縄文の美
- ・縄文王国山梨シンポジウム

〈長野県〉

明治大学黒曜石研究センター

- ・明治大学黒曜石研究センターニューズレター 第 3 号・第 4 号
- ・紀要 第 5 号

茅野市神長官守矢資料館茅野市八ヶ岳総合博物館

- ・諏訪上社造営

長野県埋蔵文化財センター

- ・信州の遺跡 第7号・第8号

〈静岡県〉

東海大学海洋学博物館

- ・東海大学博物館だより 海の博物館
Vol. 45 No.3・4 Vol.46 No.1

静岡市立登呂博物館

- ・特別展 登呂のいす展

〈愛知県〉

高浜市やきものの里かわら美術館

- ・伊藤圭介旧蔵 瓦コレクション

〈滋賀県〉

高島市教育委員会

- ・高島市文化財調査報告書第25集 滋賀県高島市 高島市内遺跡調査報告書ー平成26年度ー
- ・平成26年度地域別講演会 「古代近江の鉄生産ー継体大王から藤原仲麻呂の時代」 記録集

〈大阪府〉

関西大学博物館

- ・企画展「大学の扉を開く」
- ・事業実施報告書 大学の扉を開く

〈京都府〉

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

- ・京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座 保存・修復プロジェクト報告書
- ・2013年度生 活動報告書 京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座

- ・中澤岩太博士の美術工藝物語ー東京・巴里・京都ー

- ・2014年度生活動報告書アートマネージャー養成口座

- ・植物⇌女性ーイメージは世界をかけるー

同志社大学歴史資料館

- ・同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集 相国寺旧形境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査 第4次～第6次 本文編
- ・同志社大学歴史資料館館報 第18号

〈三重県〉

松阪市教育委員会

- ・立野古墳群発掘調査報告 第14集

松阪市文化財センター

- ・平成25年度 年報

〈兵庫県〉

関西学院大学博物館

- ・高精細画像による文化財研究 第4号 高精細画像でみる円山派の筆づかい
- ・本を彩る版画「蔵書表を愛した男ー蒐集家原野賢吉の軌跡ー」図録

〈山口県〉

山口大学埋蔵文化財資料館

- ・年報 ー平成23年度ー 年報9
- ・見島ジーコンボ古墳群 第128・137号墳出土資料調査報告書4
- ・山口大学埋蔵文化財資料館通信 『てらこや埋文』 第25号
- ・山口大学ML連携事業報告 平成26年度 展示テーマ『発見』

〈高知県〉

高知県立歴史民俗資料館

- ・ 高知県立歴史民俗資料館年報 No. 23
- ・ 高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふう
じつ 第 89 号

〈福岡県〉

筑紫野市教育委員会

- ・ 第 108 集 筑紫野市文化財調査報告書 永岡
地区遺跡確認調査
- ・ 第 109 集 大宰府条坊跡第 245 次
- ・ 第 110 集 大宰府条坊跡第 295 次 筑紫野市
文化財調査報告書

西南学院大学博物館

- ・ 西南学院大学博物館ニュース Vol. 21 ～ 24
- ・ 紀要 第 3 号
- ・ 年報 第 7 号
- ・ 大学博物館連携事業
- ・ 「2015 年度春期特別展・大学共同企画 V
Nexus 展」図録
- ・ 西南学院大学博物館 2015 秋季特別展図録
南蛮－NANBAN－昇華した芸術

筑紫野市歴史博物館

- ・ ふるさと館ちくしの 年報 15（平成 25 年度）

〈鹿児島県〉

鹿児島大学総合研究博物館

- ・ 鹿児島大学総合研究博物館年報 No. 13
- ・ 九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究
- ・ newsletter No. 37

立正大学博物館年報 14

(平成 27 〈2015〉 年度)

平成 28 (2016) 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 立正大学博物館

〒 360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL. 048 - 536 - 6150 FAX. 048 - 536 - 6170

E - mail : museum@ris.ac.jp

URL <http://www.ris.ac.jp/museum/>

印刷・製本；光写真印刷株式会社